



ルネサンスの人間論  
—— 原典翻訳集 ——

佐藤三夫 訳編



有信堂

さとう みつお  
佐藤 三夫

- 1929年 横浜市に生まれる  
1961年 東京教育大学大学院文学研究科博士課程哲学専攻の単位を修了  
1973—74年 ローマ大学文学哲学部に留学  
1977年 東京教育大学より文学博士の学位を授与される  
現 在—— 千葉大学教養部教授  
イタリア学会評議員
- 著 書 『デカルトとユマニストの時代』  
『イタリア・ルネサンスにおける人間の尊厳』
- 訳 書 ヨハネ・パウロ2世『すべての人に心を開く』  
ヘルデル・カマーラ『抑圧からの解放』  
『古典の祈り』『永遠の祈り』『聖母讃歌』

ルネサンスの人間論 —— 原典翻訳集 ——

(検印省略) 定価 3200円

1984年1月15日 初版 第1刷発行

訳編者 佐藤 三夫／発行者 下田勝司

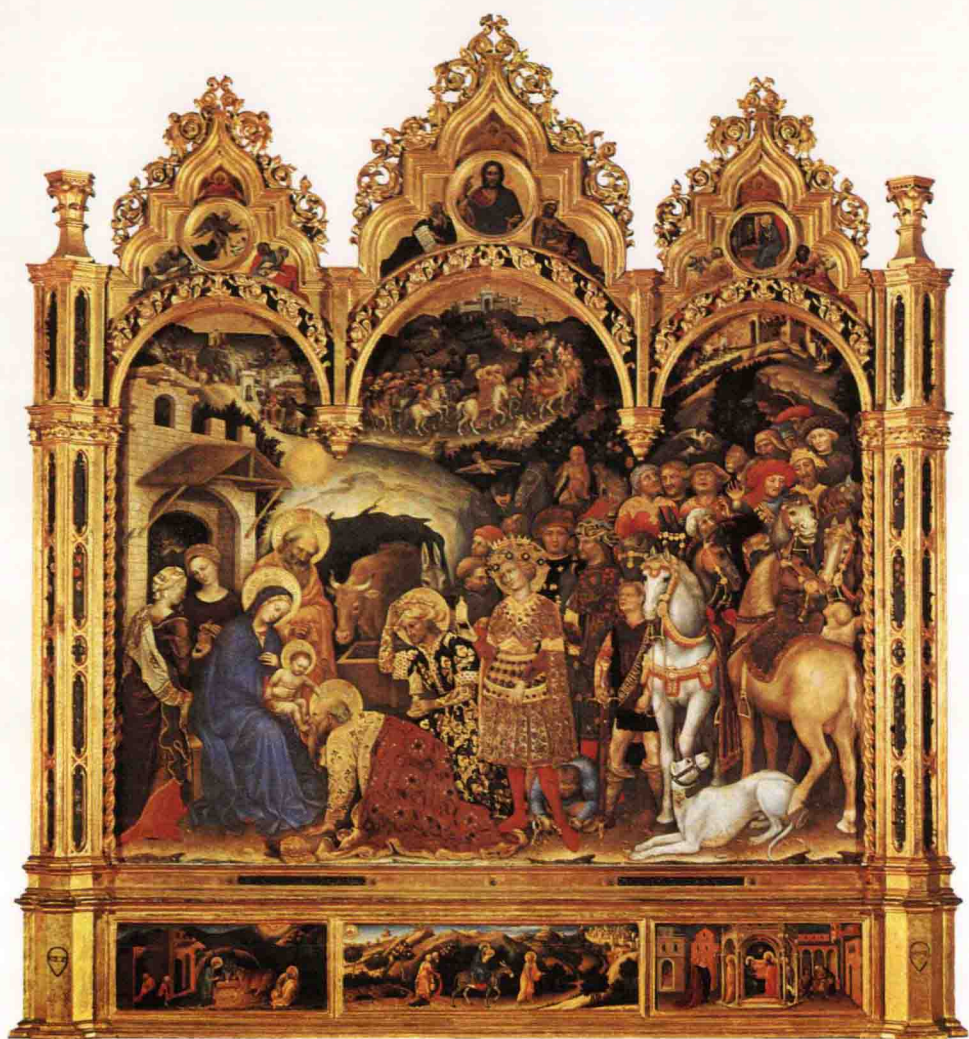
印刷・製本／イシイ企画印刷

東京都文京区本郷1-8-1 振替東京6-141750

発行所

〒113-91 TEL (03) -813-4511

株式会社 有信堂高文社



ジェンティーレ・ダ・ファブリアーノ「マギたちの礼拝」

## まえがき

人間を愛する人に、ルネサンスを愛する人に、イタリアを愛する人に本書を捧げる。そして知恵を愛する人に、古典を愛する人に、愛を知ろうとする人に捧げる。本書に編まれた原典の著者たちはすべて、そのような人々であったから。かれらはこぞって「人間の尊厳」を探求しようとした。人間を愛するがゆえにである。「人間の名誉は神に似ることであるが、その不名誉は獣に似ることである」というアウグスティヌスの言葉（『三位一体論』Ⅻ・11）は、神性と獣性とを兼ねそなえた人間にとって試練を課するものだ。神によりすがろうとすることによって神と似ることができ、自分自身の力を試そうとする欲望によって獣に堕ちるとするならば、ルネサンスのヒューマニストは神を愛しながら自身自身の力を試そうとした。それゆえ、かれらはハムレットのように魂を引裂かれ、その分裂に英雄的に耐えて偉大な人間としての記念碑を打ち建てた。

その記念碑を、かれらの魂の叫びで綴られた美しくも鮮烈な告白を、現代のハムレットたちに捧げる。現代のペトラルカや、ピッコ・デッラ・ミランドラに。喜劇をさげすみ悲劇を愛する人々に。「人間の尊厳」があなた方の人生のモットーとなるように祈りをこめて。

フィチーノよ、あなたが生まれてより五五〇年を経て、この東洋の一隅に、あなたとプラトンの愛において結ばれていると信じている者が、あなたの言葉をよみがえらせることを許したまえ。また四九〇年前に悲劇的な生を閉じたピッコよ、あなたの詩的神学がここに復活することを喜したまえ。ペトラルカよ、マネッティよ、あなた方の望んだ美しい夢を、現代の人々にも憧れさせよ。だがヴァッラよ、あなたは人間の傲慢を戒めたまえ。

一九八三年一〇月三〇日

佐藤 三夫

目次

まえがき

I 親交書簡集

——フランチェスコ・ペトラルカ

3

1 月桂冠戴冠式についての手紙……(5)

2 ヴァントゥー山登攀……(14)

3 コロンナ家および古代人宛の手紙……(40)

II 人間の尊厳と優越について

——ジャンノッツォ・マネッティ

63

III 自由意志について

——ロレンツォ・ヴァッラ

109

IV 精神に関する五つの問題……………145

——マルスイーリオ・フィチーノ

V 人間の尊厳と悲惨についての手紙……………173

——マルスイーリオ・フィチーノ

VI 人間の尊厳についての演説……………203

——ピーコ・デッラ・ミランドラ

VII ルネサンスにおける「人間の尊厳」……………245

——ポール・オスカー・クリステラー

あとがき

付 年表——生涯と著作

詳細目次

まえがき

I 親交書簡集

——フランチェスコ・ペトラルカ——

1 月桂冠戴冠式についての手紙

シチリア王ロベルト殿に宛てて（ペトラルカの戴冠について、  
および現在の事柄をいつも軽蔑する古代人礼讃者に反対して）（5）

王の秘書官バルバート・ダ・スルモーナ殿に宛てて（同じ戴冠について）（9）

注（10） 使用テクストなど（13）

2 ヴァントゥー山登攀

聖アウグスティノ会士にして聖書の教授であるディオニジ・ダ・ボルゴ・サン・  
セポルクロに宛てた書簡（自分自身の配慮について）（14）

注（24） 使用テクストなど（38）

3 コロンナ家および古代人宛の手紙

ローマ教会の枢機卿ジョヴァンニ・コロンナに宛てて（自分の旅の叙述）（40）



II 人間の尊厳と優越について ..... 63

—— ジャンノッツォ・マネッティ ——

令命高きアラゴンのアルフォンソ王に献じられた  
『人間の尊厳と優越について』の本への  
ジャンノッツォ・マネッティの序文(65)

第四卷 死の讚美と死の善なることについて、  
また人生の悲惨について(68)

注(58) 使用テキスト(61)

ロンベツの司教ジャコモ・コロナのあるたわむれの手紙への返事(41)

ローマの都から、ジョヴァンニ・コロナに宛てて(53)

マルクス・トゥッリウス・キケロに宛てて(54)

歴史家ティトゥス・リウイウスに宛てて(56)

III 自由意志について ..... 109

—— ロレンツォ・ヴァッラ ——

レリーダの司教ガルシアに宛てて(自由意志について)(111)

注(14) 使用テキストなど(143)

IV 精神に関する五つの問題

—— マルスイーリオ・フィチーノ ——

マルスイーリオ・フィチーノ、その仲間の哲学者たちに挨拶を送る(147)

あらゆる自然的種の運動は、ある一定の秩序において行われるゆえに、

ある一定の端緒からある一定の目的へと向けられ、かつ出現するということが知られる(148)

世界の最も秩序ある運動は、神の摂理によって、ある一定の目的へ向けられている(149)

諸元素、植物、および獣たちの運動は、どんな目標をもっているか(149)

精神の運動に関する五つの問題(150)

精神の運動は、ある一定の目的を顧慮している(150)

知的運動の目的は運動ではなくして、静止である(152)

精神の対象と目的は、普遍的な真理と善である(153)

靈魂の起源と終極は、ただ、無限な真理と善である(155)

靈魂はいつか、その望んだ目的や善に到達することができる(156)

精神は、その望む目的に達することが、感覚よりもいっそう可能である(161)

不滅の靈魂は、その死ぬべき身体の中ではつねに悲惨である(162)

人間は自然的な状態の外に置かれて、苦勞して幸福を追い求めれば求めるほど、

自然的な状態に復したときには、それだけ容易に幸福に到達する(164)

至福に達した精神は、決してそれを失わない(167)

注(168) 使用テキストなど(169)

V 人間の尊厳と悲惨についての手紙

—— マルスイーリオ・フィチーノ ——

幸福を願うことについて(175)

孤独な生活の有益であること(175)

ある人の死に関する慰問文(176)

真理の称讃(177)

賢明で幸福な人(178)

アヴェロエスに反対して。すなわち、唯一の人間悟性なるものは存在しないからである(179)

罪を犯す原因、希望、治療法(180)

運命に対して整えるべき恒心について(181)

誰が真の男と呼ばれるべきであるか(183)

人間性について(184)

人間の愚かさと悲惨(185)

人間の愚かさと悲惨(187)

人間の愚かさと悲惨(189)

人間の愚かさについて、また真の知識とは何であるかということ(191)

司祭の尊厳(192)

善く生きるとは何であるか(192)

宗教のない人間は獣よりも不幸である(193)

靈魂の健全と肉体の健康を越えては何も願わないことが、賢明な人の本性である(194)

人生の三つの道しるべ。および人生のひとつの最善の原理(194)

靈魂の神性と宗教について(195)

注(196) 使用テキストなど(202)

## VI 人間の尊厳についての演説

——ピーコ・デッラ・ミランドラ——

1 序章(205) 2 人間の創造(206)

3 なぜ人間は感嘆されるべきか(209) 4 ヤコブのはしご(211)

5 哲学者たちによる解釈(213) 6 古代の諸宗教の玄義(216)

7 玄義の秘教的解釈(217) 8 哲学への私欲なき愛(220)

9 討論は哲学の命である(223) 10 わたし自身の意見による提題(224)

11 数える学芸の方法と二つの魔術(230) 12 カバラの起源(235)

13 オルベウスとゾロアストラの讃歌(237)

注(239) 使用テキストなど(243)

## VII

## ルネサンスにおける「人間の尊厳」

——ポール・オスカー・クリステラー——

- 1 ルネサンス思想は人間中心主義か(247)
  - 2 ルネサンスの人間観の問題の複雑性(247)
  - 3 クリステラーの扱う特殊問題(249)
  - 4 人間の尊厳を論じた代表的思想家たち(249)
  - 5 古代における人間の讚美(250)
  - 6 中世の人間観(251)
  - 7 ベトラルカの人間論(252)
  - 8 ルネサンスの人文学(253)
  - 9 アントーニオ・ダ・バールガ、フアーチヨ、マネッティ(254)
  - 10 ルネサンス・プラトン主義(255)
  - 11 フィチーノの人間論(256)
  - 12 ピーコの『人間の尊厳についての演説』(257)
  - 13 ピーコの人間の尊厳論(258)
  - 14 ピーコにおける自由と恩寵(259)
  - 15 ピーコの立場とフィチーノの立場との比較(260)
  - 16 自由に対するピーコの熱情的な関心(260)
  - 17 人間の尊厳——最高の可能性の選択(261)
  - 18 『演説』は単なる修辞学的練習か(261)
  - 19 『弁明』と『ヘプタブルス』(262)
  - 20 『演説』はピーコの思想の表明(264)
  - 21 ポンボナツィとアリストテレス主義(264)
  - 22 ポンボナツィの靈魂論(265)
  - 23 ポンボナツィの道徳論(266)
  - 24 人文主義的運動とルネサンス哲学(267)
  - 25 近代思想へのルネサンス哲学の影響(267)
  - 26 人間の尊厳論とその反対論(268)
  - 27 結論——人間の尊厳の主張(269)
- (注(270) 使用テキストなど(273))

あとがき

- 1 ルネサンスへの憧れ(274)    2 人間の尊厳の感動的発見(274)
- 3 ルネサンス哲学における内在的超越(275)    4 人間の尊厳——人間の知恵(276)
- 5 中世思想の影響(276)    6 ルネサンス思想の複合性(277)
- 7 修辭学・道徳哲学・政治学——人間の学(278)    8 知恵の方法的使用——教育(278)
- 9 P・O・クリステラー(279)    10 ルネサンスの原典の近代語翻訳集(280)
- 11 本訳書の成り立ち(280)    12 本書の特徴(281)

付年表——生涯と著作

- フランチェスコ・ペトラルカ(一)
- ジャンノッツォ・マネッティ(V)
- ロレンツォ・ヴァッラ(VIII)
- マルスィーリオ・フィチーノ(XIV)
- ピーコ・デッラ・ミランドラ(XVI)

写真目次

- ジヨルジョ・ヴァザリー「一五〇五年八月一日、フィレンツェの軍隊が、トッレ・サン・ヴィンチエンツォにおいて、ピサ軍を撃ち破る」(見返し)  
フィレンツェ市紋章(扉)  
ジェンテイル・ダ・ファブリアーノ「マギたちの礼拝」(口絵カラー)  
アルティキエロ「フランチェスコ・ペトラルカ」(3)  
ル・トゥーシエ「一角獣といる貴婦人」つづれ織の壁掛け(4)  
ランデイ・ネロッチョ「ヘレスポントの巫女」(63)  
トルチエッロ「最後の審判」(64)  
テオドール・ドゥ・ブリ「ロレンツォ・ヴァッラ」(109)  
弁証法の女神(110)  
マルスイーリオ・フィチーノの肖像(145)  
サンドロ・ボッティチエッリ「春」(146)  
ドッソ・ドッシ「魔女キルケー」(173)  
ピエトロ・ベッレッティイーニ・ダ・コルトーナ「アテーナがヴァーナスから青春を引きはなす」(174)  
『ピーコ・デッラ・ミランドラ全集』のヴェネツィア版(一五五七年)の扉(203)  
サンドロ・ボッティチエッリ「マグニフィカトの聖母」(204)  
ルカス・クラナハ画派「女性の肖像」(245)  
ミケランジェロ・ブオナッローティ「大洪水」(246)

ルネサンスの人間論  
—— 原典翻訳集 ——



